
sorato

かわちや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o r a t o

【Nコード】

N 2 9 6 3 H

【作者名】

かわちや

【あらすじ】

鳴海虚与、通称Ⅱバカ虚与と工藤翼、通称Ⅱ（たまにアホ）翼は大の仲良し幼馴染み。今日から中学1年生。虚与は爽やか優しい系で一気に女子の注目の的に翼が一人嫉妬して？

朝輝（前書き）

BLほのぼの青春野球バカ部ラブストーリーです。下ネタ入る時はお知らせ致します（苦笑）

朝輝

キキイイイツ

ガシャ———ンツ

ワンツ

ワンツ

ワンツ

ワンツ

「うっせえんだよこのクソ犬ッ!! 噛まれてエのかアアッ!!」

「おはよう翼君」

「あ。お、おはよう……ぎゅんます…。」

―入学式.. A M 6.. 1 2

「あははははははは」

「う、うつせえバカ虚与…。」

「あれ？今日は珍しく姿が見えなくても吠えないんだね、コロちゃん」

コロちゃんは、さっきまで笑ってた（爆笑）
鳴海虚与ナルミソラト自宅前のご自宅さんの近所番犬の名前。

部屋に大きな窓から無断で入って来たのは、幼稚園からずっと一緒に幼馴染みの工藤翼。クドウツバサ

俺が今日新しい進級に上がる為に必要なものを指定靴に入れてる時は、もう指定靴を投げ捨ててベットの寝転んではこちらを見ってくる。

パジャマ姿の俺を。
一瞬足りとも見てくるのだ。

今日は晴れたな。
良かった。

「翼ー、ちゃんと必要な物全部入れてるう？ 入れてないでしょ。」

「じゃあ鞆見てろよ、バカ虚与」

「わっ!!」

ドサツと、いきなり足元に鞆を投げてきた。

「物を投げたりしちゃあいけないだろ翼ッ!! 鞆さんに謝れッ!!
大切にしないと、半年も経たない内に千切れるよお! たくウ——
——」

あ…

ドキ…

赤色の指定鞆の小さいポケットのチャックには、見馴れたストラップが一つ。

そしてまた、
筆箱のチャックにも見馴れたストラップ。

持ってきたやあ違反なんだけど…

携帯にも、
財布にも
見馴れたストラップが一つずつ
付けられていた。

このストラップは、
僕等が今まで生まれてきた証しな訳で。

同時に一緒に一瞬足りともぶれない時の狭間を過ごして来た訳で。

だから、
かけがえのない僕等のキラキラ光る宝物。

例えば、動物園に行った時に買ったお土産。

例えば、映画を見に行った時のグッズ。

例えば、水族館。

例えば：
きりが
ない。

だから、大切にしたいとおもうのは君だけじゃないんだよ？

これから何が待ち受けてるなんて、
思いもしないし
思わないよ。

ただ俺は、
ただ平凡々に
生きていきたいだけだよ…

だから、未来を決めるとかちつとも見えないとか
俺にとってはどうでもいいんだよ…

まだ。
急がなくていい

「虚与！。朝ご飯出来たから早く食べちゃいなさい。翼君来てるの
おー？翼君にも朝ご飯食べたか訊いてみてえー？」

リビングから母親が呼ぶ声が二人の耳に響いた。

「翼、朝ご飯…」

「食べてきたよ。俺漫画でも読んでっから。」

「ほんと？」

時々心配になる。

「本番中にお腹鳴っちゃったら大変でしょー？」と、まだ母は叫ぶ。

嘘付くから。

「だってさ。翼」

「ありがとうございます、食べて来ましたからっておばさんに伝え
といて。いつもありがとうございますってね…、まだ時間あるから
喉に詰まらせんなよバカ虚与。」

「はいはい、じゃあ食べて来ますねアホ翼君。」

！

翼がキッと睨んできた。

びっくりした…。

てか、ちょっと怖かった。。。 (困)

翼はB型でしかも短気だから怖いんだよねえ。
学校で喧嘩しないといいけど。。。

「今年の2年3年の先輩にちょっとヤバイ生徒さんいるらしいから、あんたも翼君は大丈夫だろうけど気を付けなさいよ？先輩と先生には一番挨拶と敬語が命綱なんだからね？お母さんの時代なんてそりゃあそれだけでも凄かったのよおー？毎日先輩とすれ違う度にすれ違う前もヒヤヒヤetc」

お袋のこの話は初めて訊いたけど、長々と続いた。

朝輝（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？ご感想、宜しく願います。楽しみにお待ちしております。

いらいら（前書き）

まだ平凡な話です。翼の心の大きな変化が見れるかも？

いらいら

「は…は…は…は…は…は」

と、リズムカルを合わせて綺麗に呼吸を整えながら黒色中心の上下
お揃いジャージで朝輝舞う団地を降りてくる一人の少年

その少年の第一歩の足音が耳に入ると近所番犬のコロちゃんは真っ
先に迷わず吠え始めた。

ワン
ワン
ワン
ワン
ワン

「うっせエぞこのクソ犬がッ」

こちらはまた近所迷惑にならないように静かに吠え返して犬相手に睨み付けた。

家の前の道路でランニングする為にまだ寝ぼけている身体を解すため軽い体操をしていた虚与をまた会うなり直ぐにバカにし始めた。

「おい、小さい野球少年ー。会社を首にされて家族に言えないで、酒に頼って飲酒運転のハゲおじさんに引かれちまうぞー?？」

プイ。と、翼を虚与が無視をして一人先に進んでまだ霧が薄々立つ朝の団地を出た。

ブチッ。

「無視かよおいッバカにしてんのかよ虚与ッ!!」

一度無視しただけで、こうキレるからはつきり言って疲れるんだ。

結局俺は、家もあまりなければ人気は全く無しの山の中に入るまで無視し続けた。

それまで翼は、バカバカバカ言い。

お前はそれしか言えないのかってんだ。。。（苛々苛々。）

諦めたのか。

急に坂になってから静かになった翼を気になり始める虚与であった。

そして、ゆっくりゆっくりになってゆき虚与は後ろを走っていた翼のペースに合わせるようになった。

最初、体力使い果たしたのか。
時々、スピードが落ちてゆくのを翼が可笑しく微笑む。

「だから言ったじゃんか。先輩と先生には必ず…」

「俺がそういうの駄目なの、知ってて…っ」

「言わないよ。分かってるから。これからも…多分ね。」

「は、多分かよ。はっきりしろよな、そういうところ。」

笑う翼に安心する虚与。

虚与の体力を気にする翼。

此処の山の中の道のりはもう小学生のリトルリーグからの馴染みのトレーニングコース。道は真っ直ぐ、車の通れも朝一で早い引かれる事も、遭難する事もない。

虚与の親の許可も取ってある、翼だからこそ安心だと。

「うっ…っ
て…」

足に違和感を感じた翼は、虚与にバレないように顔を隠した。

ズキッ

「い、た…っ
あ…」

「おい…虚与…足
やっちゃったのかよ…」

突然、会話を中断させゆっくりゆっくり止まりながらその場に左足を抱えながら座り込んだ。

「みたい…っ…っ」

「馬鹿野郎、先突っ走るからだろうが…とりあえず座れる場所…っつてもねえよなあ…。神社も過ぎちまったし…たく…」

「ごめん…」

「謝るくらいなら、自分の身体くらい責任持って管理しろ。そんなんじゃアレギュラーにもなれねえぞ…たく…」

「うん…さっきはむきになり過ぎた…」

「まあ、3年の先輩の面にいきなり挨拶代わりとはいえ顔面にグーだかな。。。唯一お前は分かってくれてるけど、向こうが悪いんだよ…俺は悪くねえ。正しい事をしたまでだ。」

「。。。』

「帰るぞ。今日はおばさんに病院連れてって貰え。それまでこの俺がレギュラー宣言してやる」

ドキン…ッ

「うん…」

—
翌
日

キンコーンカーンコーン…

「おはよー」

「おはよー」

「お疲れ様でしたー」

—A
M 7 .. 4 9

—グラウンド：

「クソ1年野郎共……。全部片すの俺に任せやがって……………ま……。あんなヤツらはしょせんそんなもんだろ。一生草取りでもしてろクソ。」↑君も新生生ですよ？。

グラウンドの跡になった波を綺麗にする道具を顎に寄せ、スタスタと朝一のホームルームが始まってしまふ為外で制服に着替え教室に帰る同級生を一人見送る翼

「野球を馬鹿にしやがって…、どうせ親の言いなり集団だろうが…
気持ち悪いんだよ…たく…つまんねえ世の中だなおい…」

| A
M 8 .. 3
1

ガ
シ
ャ
ン
ツ

その道具を集めているところに倒し、3ゝ4個、置きっぱなしのボールを手の中に収め緑のガードコーナーからピッチング距離まで離れ一つだけ掌の中に残した

そして、グラウンドの隣で赤信号で車が止まる中構えた

そして呼吸を止め、
投げる

ガシャンッ

「クソッ!!」

大きくブレたコースなキレ、地面を激しくけつった。
その度にシューズは削られてゆく…。

ガシャンッ

「クソツタレがッ!!」

心が乱れている…

「何で、こんなに苛つくんだよ…自分が短気だって分かってっからか!? それともなんだよッ!! ただ殴った事をまた引きずってんのかよッ!! それか、俺が短気だからアイツに怪我させたからかッ!! 自分が嫌いなのかよ俺はッ!?!」

ガシャ——ンッ！！

翼は血が上った脳みそを治める為唇を強く強く噛み締める。

先程元に戻した道具の固まりを一気に横へ倒してしまった。

ダンッ

「クソッ…苛々する…ッ!! 一体、なんなんだよこの苛々はー……
……ちくしょー…ッ」

さっさと来いよ…
虚与…

お前が隣に居エと、
どうも落ち着かねエ…

この気持ち、

素直に伝えといた方が良いのかよ…

それも、

伝え方も分かんねえ…っ

いらいら（後書き）

ご感想、お待ちしております。

本気モード突入。(前書き)

ほのぼのです、あっという間に2年生になります。

本気モード突入。

不安だ。。。。

堪らなく不安だったこの1日。。。。

翼は本当に大丈夫だろうか…

またあの先輩達と睨み合いっこしてないだろうか…

はあ。

病院行って大人しく自宅待機してるけど。。。。

こっち（気持ち）の方は全然騒いでるんだよね。。。。

「はあ。。。。」

夢、
翼と誓った。

「何が何でも甲子園に行く。」

またちょっと伸びちゃったな。。。
あの時は俺が悪かったのかな。。。
ムキになり過ぎたのはホントだけど。。

翼も少しは俺の気持ち考えて行動して貰いたい。
まあ、お婆さんとおじさんが相変わらずアメリカで野球関係の仕事
しててなかなか帰れない淋しさからもあるから…毎回少しは多めに
見てやろうとは思っけど。。

ちょっと最近、
甘えかせ過ぎたかな。。。
反省反省。。。
って何で俺が反省しなくちゃいけないんだ？

ん？
俺は翼の親代わりかよ…たく…。。
どうせ今も一人拗ねて物に当たってそうだし。

ちょっとリハビリ代わりに行って来るか…いつもの場所に。

ピンポ——ン。

客？

最近、勧誘が多いんだよなあ。。。特に休みの時、はつきり言って困る。。。

「虚与————？翼君が来てくれたわよお————？部屋にお通しするわねえ————。」

ゲ。翼。。。。

なんか今は顔、合わせにくいかも。。。

ガラガラ…
さっき開けたドアをまた閉めた。

ガラガラ…

「！」

「何で閉めんだよ…クソ…。」

「あ。。。ごめん。。。。」

「部屋、入って…？」

何か翼、後ろに何か大きなもの隠してる…
なんだろう…。
翼の顔ツンでってる（笑）。

「どうぞ。」

ガラガラ…

「適当に座って？荷物も。」

「お前はベツトに座れ、俺はこの椅子に座らせて貰う…前に…これ…邪魔だから、どっか適当に飾ってくれる？」

わお…。

凄い…。

何て凄い花なんだ。。。

ってかきつとこれ5000円くらいするよ？こんなに束ねたら、だ
んだん1つ1つずつ薔薇のはりが落ちちゃうよ…

「凄いね。翼、まさか盗んできたんじゃないよね。」

「そう、思っ**て**れば。」

「あはははは。冗談だよ、翼ありがとう。お袋に頼んで花瓶に入れて貰うよ。」

「お、おう…虚与…後…悪かったな…」

「え？何が？」

「いや。別に…何でもねえよバーカ。虚与の馬鹿野郎！怪我が完治次第また直ぐにトレーニング開始だかな、休んどいた分覚悟しとけよお？俺が特別プランを立てといたからな、しかも徹夜で。」

「なら、勉強に使ってよその時間。。。」

「な、なんだよテメェッ!! 人様に心配かけやがってッちよつと足捻ったくらいで、」

「で?」

「何でも…ねえ…よ…」

「今日は変だね翼」

「な、何言ってやがるッだからテメエが怪我をッ!!」

「怪我をしたから？」

「一生怪我してろ。」

「それじゃあ夢、叶えられないじゃん」

俺は意地悪してると分かっておいてまた苦笑した。

すると翼は顔事、他所へ頼杖付いて向けながらこう言った。

「ンなら、俺が連れてってやるつつつてんだろが…もし、俺じゃなくて虚与が野球出来ねえ身体になっちまったらの話だかな…。
出来るまでとことん最期までやって貰うぜ。」

「はいはい、分かりましたよ。将来、おばさん達の仕事の中心で投

げるんだよね。ボール」

「俺様の夢、分かってんじやねえかよ。流石俺様の相棒だぜな、虚与」

「はいはい」

そして、僕達は…

草取り、
練習、

部活の練習後の独自トレーニング。

繰り返し、
繰り返し
繰り返し、

ワンッワンッワンッ
ワンッワンッ

「あ、来る。」

ガラガラ…

「よ、虚与。朝飯食ったんなら約束通り今日からこっから学校まで走ってくぞ!♪」

「ノリノリだね。翼、何かあったの？」

「んー？別に。♪」

僕達は今日から2年生になる。

2年生、もうレギュラー勝ち取っても良い年だよな…。

3年の先輩とかにもし恨まれたって関係ない、僕達は僕達の野球をやればいい。

そして、同じ高校から推薦を二人分受けるんだ。夢にもあるけど、少しでも好きなスポーツで親に楽しめたいからね。うるさい弟も何れは高校生になるんだから。

ってか今までの1年は身体作りで、2年からは本当に死ぬ気で取りに行かなきゃ、行かないとあっという間に時間だけが過ぎてゆく…っ。

彼の夢の欠片が何処かへ行ってしまう…

キンコーンカーンコーン…

「起立、礼」

ガラガラッ!!

「ちょっと待ったアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!!!!!」

ビ、ビク————ッ！！

「ありがとうございました————ッ！！！！！！！！！！」

「あ、ありがとうございましたー…」

「は、走って来たア?! A小方面まだ先の向こうから此処までを3往復!?!!!」

「あ、は、はい…すみません先生驚かせてしまって…ホームルーム遅れてしまって…」

メガネを掛け優しいクールと評判の高い2年1組の担任の先生。
即ち、俺と翼はやっと念願のクラスメートになった。

「ちゃんと水分を十分に取ったのか!? 怪我はしていないのか!?」

「は、はい。水分も十分に取りましたし、怪我もありません。心配掛けてすみません田仲先生」

本当に優しい先生なんだな。
翼に見習って欲しいよ。

クラスメートになったのは嬉しさ大変さ半分半分だよ。ホント。

「じゃあ、とりあえずそのジャージ姿では授業受けさせないから制服に着替えて来なさい」

「はい」

「後、次の時間委員会と係決めるからこの黒板に書かれている中のみから一つ考えときなさい。多数居たら話し合いかじゃんけんだからね」

「特に大事な報告はそれだけだ。」

「ありがとうございます…」

ガラガラ…

「さっさと着替えに行こうぜ虚与」

「うん…」

キンコーンカーンコーン…

〔起立、礼〕

〔お願いします〕

〔着席〕

ガタガタ…ッ

「じゃあ、この列からやりたいものに名前を書いていってくれ。二人以上居たら話し合いかじゃんけんで決めて貰うからな」

―数分後

「それじゃあ、全員名前書いたな。学級委員居ないじゃないかア、積極性を持たないと高校じゃあやっていけないぞお？勉強力、精神的なものを鍛いあげるのが学校だからな。誰かやるヤツ居ないのかア？高校から必ず一つは推薦されやすくなるぞおー」

ガタ…

「じゃあ、僕がやります」

「! 虚与テメツ」

ガタッ

「やりますよ、上からの推薦率が高くなるんだったらね」

「じゃあ俺もッ!!」

「学級委員は二人も要らないよ。なら、そのやる気を君にはとれない。保健委員に務めて貰うかな」

「な…っ！」

キンコーンカーンコーン…

「起立、礼」

「ありがとうございましたー」

先生が教室を出た後：

ガタッ

ガタタタタッ

「虚与テメツ！テメエが学級委員になっちゃったら部活練習が削られるじゃねえかッ！！テメツ、分かって決めやがったな！？ああ！？」

「だって、1年の時に係だったからさ。せめてこの後の2年間は学級委員を一番優先に委員をやらないと、ホントに成績面からしては

推薦の話は来ないと思うって思ったらずが挙げられずには居られなくなっちゃって」

休憩時間の教室、クラスメート達も外に居る生徒達も二人の会話の内容がどうやら気になるらしい。

一応喧嘩もしないで欲しいとも心配はしている。

珍しく虚与が翼に壁の方に押し付けられている光景だ。

この後、翼が怒鳴り上げると皆思ったが？

「そ、それもそうだよな…最終目的高の乙高からの推薦が来たらもう当分焦らなくても良いし、試験受けて合格入学より推薦の方が断然勉強面の方でも眼エ付けられるしな。」

「だよね。納得？だから、トレーニング…身体鍛えるのと勉強と精神力身体と心が機能する全ての能力全面をこの中学残り早い2年強化しなきゃいけないんだ。此処までの意味、分かったかな？翼」

「お、おう…。流石俺の相棒だぜ…。考え方と言葉の表現力が違い過ぎるぜ…」

（（いや…二人共、ルックスも言葉の表現力、身体心全ての機能が中学2年生じゃないんですけど。漫画みたくのキャラクターに見えるんだけど男子だけの気のせいですか！））と、クラスメートの男子達。

（（格好良い…。ってゆーか…もうこの町に居る男子全員の中でこの二人にしか男の人っていう見方が出来る…））

本気モード突入。(後書き)

ご感想、宜しくお願いします。楽しみに待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963h/>

sorato

2010年10月28日04時31分発行